風の電話をたどって 1

tadotte@asahi.com

被災地との差に違和感

2011年4月末、私はこの庭を見つけました。

東日本大震災で市街地が壊滅した岩手県大槌町で取材を始め、1カ月が経っていました。遺体が埋まるがれきの山。津波が引き起こした火事で焼けた建物。水産加工場から流れて腐った魚のにおい。海風にあおられて巻き上がる砂。避難所で5千人が暮らし、家族の遺体を捜しに安置所を巡り、見つかったことを「よかった」と喜び合うのがあいさつ代わりでした。

家族を失って悲しいとか、それでも負けないとかいう記事はもういらない。町や人が、どう復興していくか書きたい――。そう思って東京から来てはみましたが、とてもそんな状況ではありません。

そんな時、海を望む鯨山に「世捨て人」のごとく住み、庭をせっせと造っている人がいると聞きました。曲がりくねった山道を上ると、そこは別世界でした。千坪を超す敷地に、英国風の庭が広がっていました。長身で浅黒く彫りの深い顔をした佐々木格（いたる）さん(70)が、黙々と手入れをしていました。

部屋のテーブルには、明かりをともす蜜蝋（みつろう）がありました。どこも停電していたので、友人にも配ったそうです。震災当夜から降った雪は、球状に固めて塩をふり、冷蔵庫に入れて生ものが腐らないようにしていました。まき風呂も植物の温室の中に造っていました。「ここに電気の復旧工事が来るのは最後だろう」と、手を打っていたそうです。

佐々木さんは、岩手県釜石市の都市部から鯨山に移り住んで12年になっていました。会社を早期退職し「これからはやりたいことだけをやる」「田舎暮らしでなく田舎造りをする」と、荒れ地を少しずつ開墾して花壇や池や小屋を造っていました。

海を見下ろす庭に立つ「風の電話ボックス」＝岩手県大槌町吉里々々

その庭に、白い木製の電話ボックスが立っていました。中にはダイヤル式の黒電話が置いてあり、電話線はつながっていない。筆でこう書いてありました。

〈風の電話は心でします〉

「会えなくなった人に思いを伝えるため」造ったそうです。電話ボックスはパチンコ店で使っていたのを改装時に譲り受け、屋根をつけて完成したのが、話を聞いた数日前でした。周囲には、鎮魂を表現した「メモリアルガーデン」を造り始めていました。

私はその記事を書きました。反響を呼び、多くの人が全国から庭を訪ね、故人を思って受話器を握りました。

ただ、地元の大槌や被災地からは、ほとんど来ませんでした。私も遺族に勧める気にはなりませんでした。

私は「違和感」を抱いていました。電話の魅力を感じて記事は書いたが、一方で、庭から見下ろす浪板海岸の惨状とは落差がありすぎました。松並木はなぎ倒され、皇族も宿泊したことのあるホテルは廃虚になっていました。

私は取材を終えると足早にがれきの町に戻りました。たまに大槌から東京に行った時、帰りたくなる気持ちと似ていました。

（編集委員・東野真和）

◇

「風の電話」を2人の記者が交互にたどります。

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。